Rio

豊田市矢作川研究所　月報

◆矢作川が奏でる観光地
　― 平戸橋勘八峡を辿る　その１ ―
◆昆虫今昔
　― 矢作川中流域　平戸橋～枝下町 ―
◆西の浜クリーンアップ活動に参加しませんか

11
2011
No.158

豊田市矢作川研究所　〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028　e-mail yahagi@yahagigawa.jp　URL http://yahagigawa.jp

矢作川が奏でる観光地

― 平戸橋勘八峡を辿る　その１ ―

倉地　格

「矢作」の名は、文献によると大変古くからあったようだ。平安期の催馬楽（さいばら）〔古代の歌謡〕や、鎌倉期の明日香和歌集などに既に登場している。因みに「三河の国」も新井白石の『国郡名考』や本居宣長の『古事記伝』によると、矢作川・豊川・男川の三つの川から「三河」とされたとある。しかし、大宝律令以前の三河の国とは西三河に限られ、東三河は穂の国であったことから「三河」の原義は西三河の矢作川を指し、御河、水河、美河とする説の方が説得力がある。

“水に水源（みなもと）尋ぬれば 始めは苔の雫なり”

悠久の時を経て、とうとうと流れ続けている矢作川は、15 世紀中頃までは、幾筋もの自然の流れのままで、中・下流で氾濫を繰り返し、流れを変えていたようだ。難渋した人々の懸命な護岸工事、築堤工事など水との戦いにより、次第に被害も減少し、安全な川に姿を変え、川を利用した水運が承応２（1653）年６月に信州根羽村の桧原山から切り出した木材を根羽川に流して、本流で集材したことから本格的にスタートした。

筏流しを始め、海と山とを結ぶ物資流通はもとより、経済も文化も教育も川という大動脈に依存して発展してきたのである。一方流域では川を通しての歴史や文化を育む機運と共に、自然環境の特性や景勝を生かした観光地づくりが脚光を浴び遠近（おちこち）で進められた。

■勘八山伝説

矢作川の河口より約 46 ㎞地点にある越戸ダム付近の左岸一帯、国道 153 号線沿いに小高い山が連なっている（図 1）。細長いこの山は標高 166 m、面積約 707 ha、古くは東広瀬村の区域に属し、枝下山と呼ばれていた。

関ヶ原の合戦で徳川家康が勝利を治めた後の江戸時代初頭に、武田信玄の家臣、岩崎勘八なる盗賊が多くの手下と共にこの山に住みつき、近隣の村々を荒らしまわった。困り果てた代官は、捕らえた者には恩賞を出すとの御触れを出した。これを聞いた東枝下村を中心とした村人が、総力をあげて勘八を捕え、沢山の褒美をいただき、以来、天領御林であった枝下山は勘八山となったそうだ。

大正 12（1923）年９月１日に発生した関東大震災（M 7.9、死者・行方不明 104,600 人）の復興工事の用材として、岐阜県の樵（きこり）〈通称、飛騨子〉も多数参加して御領林であり良材の松が豊富なこの山から、多くの木材が伐採され、三河鉄道、越戸駅に集荷、目的地に

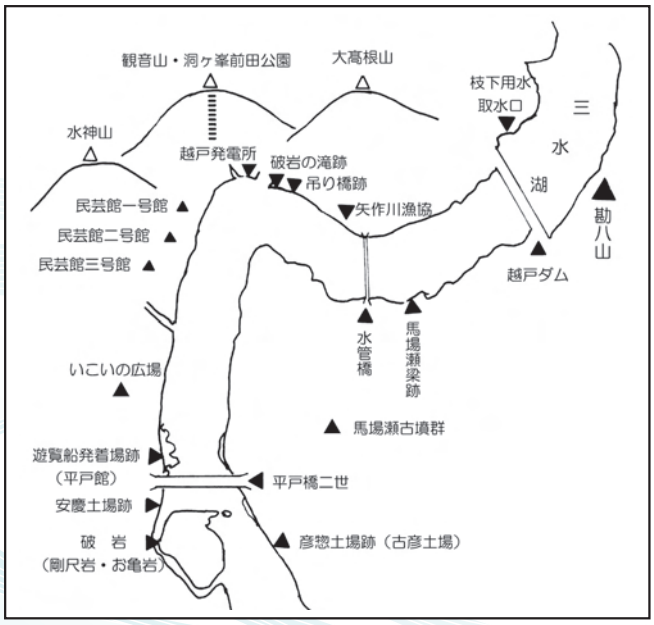

図１　勘八峡周辺図

送り出された。また、松茸の産地としても有名で、良質なるがゆえ「勘八松茸」の名称で名古屋、岡崎、横浜、東京、遠くは仙台までも運ばれたが、伊勢湾台風で壊滅的な被害にあい、全く採れなくなった。

■往時の勘八峡

平戸橋上からの眺望は、左には高根山、観音山、水神山の稜線が連なり右には勘八山の頂など、正しく天下を取った様な錯覚を感じさせる絶景である。この橋より上流 2㎞程の周辺一帯を、何時の時代からか定かでないが、勘八峡という。矢作川は源流から約 70 ㎞程は、山間（やまあい）の切り立った自然美の峡谷を蛇行しながら南流している。長野県・岐阜県の山中からスタートした水の長い旅も、やっと平野らしい地形にたどり着く。その出口ともいうべき所が勘八峡で、峡谷の流れから大河の流れに変わる地である。

この様な立地から、6 世紀頃築造の馬場瀬（まばせ）古墳をはじめ 20 数基の古墳群が点在し、古代から近世に至る歴史遺産、文化資料が豊富にある。まさに歴史研究者にとっては羨望の地といえる。古くは筏流しや管流し、遊覧船が繁く通り、勘八寝覚（ねざめ）といわれた（図 2）。流れの各所に点在する奇岩、激流の難所には鬼戻し・筏返し・源氏の瀬・猪子渡し・一の瀬などと呼び名が付いて、筏師や船頭は命懸けで腕を競った。

図 2　勘八寝覚といわれていた頃の勘八峡（前田悠紀吉氏　提供）

大正 10（1921）年頃から鵜飼いが開催され、鵜飼い船や遊覧船の灯火が鮮やかに映え、手筒花火や金魚花火が川面に向かって打ち込まれた。それを見ようと橋の上は黒山の人で埋まり、交通整理の巡査がサーベルを腰にぶら下げ右往左往したとか。大正 13（1924）年、越戸駅止まりの三河鉄道が猿投駅まで延伸され、平戸橋駅の開業に伴い、平戸橋勘八峡は観光地としての佳境を迎えた。

■全愛知県新十名所、平戸橋勘八峡誕生の秘話

新愛知新聞（現中日新聞）の主催による「全愛知県下新十名所」の選定が、昭和 2（1927）年 5 月 20 日から 7 月 5 日までの 47 日間にわたって住民投票により繰り広げられた。当時の新聞には、「郷土愛に燃える熱と侠気の人々により、血湧き肉躍る程の猛烈なる激戦が続けられ・・・・」とある。

昭和 2 年の猿投村は戸数 1,082 戸、人口は本籍人 7,382 人（その内、現住人 6,395 人）、今日の姿とはほど遠い、小さな農業を中心とした村であった。この小村にある勘八峡が県下 6 位、822,015 票を獲得した（図 3）。これは先人達の総力戦と、思いつくすべての奇策、奇襲が図られた結果であろう。

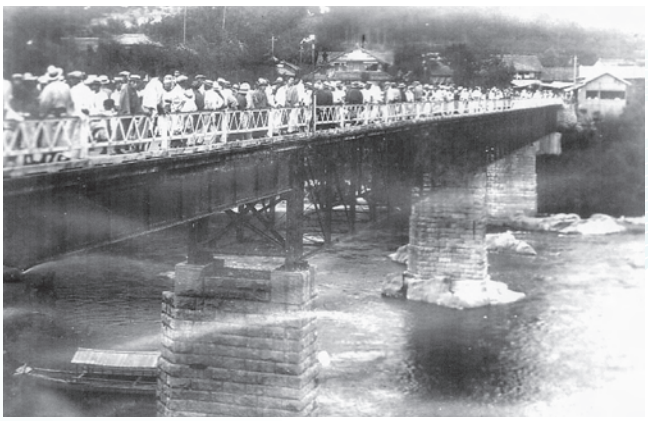

図 3　新十名所に選ばれた祝賀の花火大会に繰り出す人々（前田悠紀吉氏 所蔵）

投票がスタートすると、先ず、名古屋方面の勘八峡推奨者によって運動の火蓋がきられ、候補地として名乗りをあげ戦線に立った。爾来（じらい）猿投村は挙母村一体となり熱誠努力をかさね、隣接する町村や西加茂郡出身の在名者の力強い応援や、地元青年団の涙ぐましい活動が票数を集めた。近い将来に新三河鉄道の名古屋・挙母間の鉄道敷設を視界にした挙母町では地元以上に熱心で、町内に応援事務所を設けて、郡内の別の候補地、三好稲荷とも呼応して集票活動に当たった。その一策として、投票用紙 5 枚と引き替えに宝集座（後の挙母劇場）での芝居を無料観劇できるなど、手段を選ばず投票戦線も激烈であったことが想像できる。

（この項は矢作川研究所研究員、逵　志保氏より資料のご提供をいただき、長期にわたり疑問視されていた十名所選定の年度が解明できました。感謝）

■勘八峡を変えた越戸ダム

昭和 2（1927）年 11 月に越戸ダム着工、同 4（1929）年 12 月に発電所と共に完成した（図 4）。筏師や船頭が急流で難渋した荒瀬や、獅子岩、浮岩、鯛岩、象岩などなど訪れた人々を感嘆させた奇岩のパノラマ。これらすべてが三水湖という大湖に没してしまった。

昭和 20 年代後半頃、この大湖に飛び込んで泳ぎ酷く叱られたことや、貸しボートが数多くあり、湖面に

映るツーショットの影に、いつの日か俺もと思いを馳せたのも、淡い思い出となっている。

昭和２年 11 月、三河水力電気 (株) が巨大な堰（いぜき）を勘八峡に築き、発電所を越戸に設け、越えて２年後竣工された。堰の高さは一百尺（30 m余）、広々として水をたたえ、堰の上流一里 (約 4 ㎞) の所まで一大湖となった。碧玉 (緑色の宝石の意) の様な水が青々と広がって、水の渦巻きが今まで深い谷だった所に渦巻くことになった。東岸の力石川、西岸の御船川が来り注いで大湖の周廻（めぐり）は三里（約 12 ㎞）にも達した。三水湖（矢作川、力石川、御船川の三つの河川）と命名した。思うに三水湖と呼ぶに到ったわけは三つの川が流れ集まって、立派な湖となっているためである。

〈昭和５年に記録された三水湖の由来より（一部編集）〉

電力開発により周辺地域の暮らしが明るくなると共に、下流域での水害が激減し、治水は安定した。しかし、筏流し、舟運、鵜飼、遊覧船など古き良き時代の矢作川の情緒の多くが失われたことも惜しむべき事実である。越戸ダムの誕生は、古い矢作川との関わりに終わりを告げ、同時に人と自然とのバランスが不可欠な新時代の水先案内として、川との関係が問われる幕開けとなった。

（くらち　いたる、アド清流愛護会 会長）

図４　越戸ダム建設中の様子（昭和３年頃，柴田和己氏所蔵）

昆虫今昔　― 矢作川中流域　平戸橋～枝下町 ―

間野　隆裕

昆虫の多くは植物を食べる。その植物の中で、矢作川の河畔を彩る樹と言えば、まずヤナギであろう。幼虫がヤナギを食べるコムラサキ（図 1）というチョウがいる。国蝶として有名なオオムラサキ（図 2）と比較して、一回り小さく、♂の羽根の表面が紫色に光り輝くのでこの名がある。このコムラサキには、遺伝的に珍しい黒色型があり、この付近は全国的にその黒色型の密度が高い地域として有名である。コムラサキの最も古い記録は、1956 年に遡る。その年に生まれた人は現在 55 才。人の人生のほぼ２世代を遡ることになるが、人間の文化の歴史からすると、いかに最近の記録しか残されていないかがわかる。生き物の正確な記録は、それほど新しいものしか残されていない。ただ、今記録をしないと、将来も、かつてどのような生き物が生息していたか知るすべを失う事になる。幸いコムラサキについては、1956 年以降の記録を辿ると、現在まで引き続いて生息していることがわかる。

矢作川中流域の平戸橋から枝下町にかけては、周囲に里山が残されている場所から、矢作川が平地に流れ出る地域でもある。言い換えると、上流から流れてきた矢作川が幾重にもその澪スジを変えた地域で、農民は上流から流されて培われた肥沃な土壌の恩恵にあずかったであろう。矢作川が上流から流してきたものは水と土壌ばかりではなく、生き物もそれによって広がってきたと考えられる。山地の里山の稀少種であるオオムラサキは、現在この付近を南限としているし、普通、深山でしか記録のないキタスカシバ（図 3）というハチに酷似するガも、開けた河畔林で採れている。

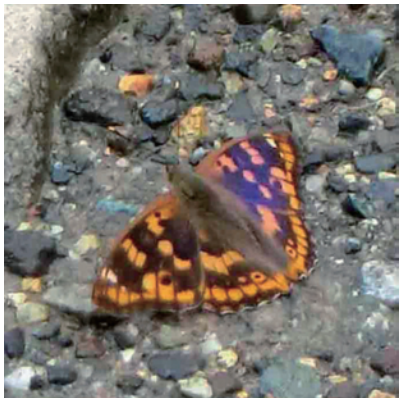

図１　路上に止まるコムラサキの♂

図２　国蝶　オオムラサキの♂

図３　ハチに似たキタスカシバ（ガ）

平地に流れてきた川は、一気に蛇行する。人はその蛇行を堤防でさえぎり、残された土地を農地や宅地などに有効利用している。反面、かつて蛇行などによって作られた湿地やため池に生息した生き物は、その環境と共に姿を消した。1960 年代から 70 年代に湿地に多産したヒメヒカゲは、国や県でランクの高い絶滅危惧種となった。もと砂礫地であった状態から河畔には林が繁茂し、河畔の砂礫地特有の植物を食べて生活していたツマグロキチョウ（図 4）は姿を消した。その代わり繁茂した竹林には、タイワンタケクマバチ（図 5）という外来種が大繁殖して、どんどん分布を拡大している。川から姿を消したツマグロキチョウはアレチケツメイという外来の植物を食べて、開発した空き地で生息するようになってきたのは皮肉な現象である。

私たちは、身近な生き物の変化すら良くわからないが、着実にその生息地も、密度も、生息する種類も変化し、知らないうちに元に戻すことが出来ないような状況となっている。特に絶滅した種類は、どんなに文明が発達しても元に戻すことは不可能である。私たちは、矢作川の恩恵によって豊かな暮らしを手に入れたが、昔のように矢作川流域の豊かな自然に戻すことは不可能かもしれない。今後は身近な自然の変化に少し目を向けて、共存共栄する策を考える時期に来ているように思う。

（まの　たかひろ、豊田市矢作川研究所　総括研究員）

図 4　ツマグロキチョウの越冬型

図 5　竹に巣穴を開けている
タイワンタケクマバチ♂

▶西の浜クリーンアップ活動に参加しませんか

渥美半島の浜は三河湾のゴミが集まり浜に打ち上げられ大変汚れています。亀の子隊は、西の浜のゴミの多さに驚き平成 11 年に渥美町の小学生が中心になって発足し、以降毎月 1 回の清掃活動を行っています。集められるゴミの中には、矢作川から流れてくるゴミもたくさんあります。ぜひ、子どもたちと一緒にゴミを拾い、水系の環境を考えてみましょう。

ゴミ拾いの後は、「海水からの塩作り」です。海水から作った塩でおにぎりを食べ、大昔の人たちが感謝したその恵みを味わいます。

■**と　き**　11 月 27（日）午前 7 時～午後 5 時頃
■**ところ**　田原市西の浜（豊田市役所付近からバスが出ます）
■**対　象**　小学生以上の子と親
■**定　員**　抽せん 40 人
■**参加費**　大人 1,000 円、子ども 500 円
■**申込み・問合せ**　11 月 14 日（月）までに
電話かファックスで矢作川「川会議」事務局へ
（矢作川研究所内、TEL 34-6860　FAX 34-6028）

後記

昭和 2 年に愛知県の新十名所に選ばれた平戸橋勘八峡。現在の豊田市ではさしずめ、紅葉時期の香嵐渓に匹敵する賑わいだったようです。かつての急流はダム湖に姿を変え、遊覧船や筏流しは終りを告げましたが、矢作川が丘陵地から平地に流れ出すこの地 には、多くの史跡や豊かな自然が残され、貴重な昆虫も生息しています。次号では戦後から現在までの平戸橋勘八峡の歩み、そしてこの地で始まった新たな息吹を倉地さんに続編として紹介頂きます。（白）

R100 再生紙を使用しています